

シリーズ〈詩線をつなげて〉第二回

二〇二二年 五月

高麗郷住民

上野文康

I 詩を読む(今月の先行詩)

海を流れる河

石原吉郎

そこが河口
そこが河の終り
そこから海となる
そのひとところを
たしかめてから
河はあふれて
それをこえた
のりこえて さらに
ゆたかな河床を生んだ
海へはついに
まぎれえない
ふたすじの意志で
岸をかぎり
海よりもさらにとおく
海よりもさらにゆるやかに
河は
海を流れつづけた

〈この詩は同名の単行本の中に収録されていて、詩の後に回想風の文が続いている。その中から、いくらか引用する。〉

いつの頃からか私には、海を流れる河というイメージが定着し、根をおろしてしまっ

た。
私がたたずんだ地点から上流は、河の過去であり、下流は河の未来であり、たたずんだ私のはばだけが河の「現在」として、私の目の前にあつた。そして私がたたずんでいるそのあいだも、河はつきからつきへと生まれかわるようになつて、三つの時間帯を通過しつづつあつた。

河は永遠の継続、永遠の未完了として私の前を、ひたすらに流れつづけた。

石原吉郎『海を流れる河』(花神社) 一九七四年

詩を書くという試み(前回の「もっと強く 再びの」)の中では、いくつもの問題にぶつかった。この試みは、戦後詩人茨木のり子の詩「もっと強く」への共感から出発しているが、その詩の力(それをぼくは詩線と呼んでいる)を、現在を生きるぼくたちのことばを生みだす、機縁にしたいという思いがあった。七十年を隔てた時間の間に、文学的な橋を架けようとしたのだ。ここには、歴史的時間とどう対するかということが、避けられない課題として埋め込まれているのだが、そのことがなかなか分からなかった。ジレンマが続いた。茨木の生きた戦後期と私たちの生きる現在、それぞれの時代のとらえ方が平板で固定的であるうちは、詩行は立ち上がってこない。

一方で、茨木のり子の詩行も、書きあがった詩行として彫刻のように立っていて、詩線をつなげるとは言ってみたものの、動きが生じず、媒介となるものもないので、ことばが出てこない状態から抜け出ることができなかった。

詩が生成するには、その前提としての要件があるようで、今回の場合においては、この社会を、この時代を、どのように受感しているか、言い換えると、その歴史の場をとらえる感性の深度が問題となるようだ。

これは、詩の側から見ても同様のことがあり、書かれた詩行ではなく、書かれる前の詩行が生成する場、言わば詩線が生まれるベクトルを感じることに、あるいはそこに想像力が及ぶことが必要なのだと思に至った。

これら二つのことを合わせて考えると、現実の渾沌・歴史的混沌とは社会的・歴史的な諸ベクトルが注いでいる場であり、その諸ベクトルへの反作用として詩線が生まれてくると考えられ、それが詩の現場であり、そこに身を置くことが詩を書く行為である。歴史の場の動態、詩作の動態を、ベクトルという動線のイメージで考え、感じられるようになって来たとき、ぼくのなかで何かが変わってきたように思う。

期待の次元 回想の次元

このようなことを考える過程で、歴史的状況をどう受け止めるかという身構えというか、方法をぼくは身につけてこなかったということにも思い至った。鶴見俊輔の『期待と回想』がこういうことについて考えている本であったことに、すぐ思い当たったので、読み直してみた。はたして、そのとおりであった。『期待と回想』(上下巻 晶文社)(一九九五年刊)は鶴見俊輔著作集全十二巻が出たのを機会に、北沢恒彦、小笠原信夫、塩沢由典の三人が聞き手となって、鶴見俊輔の仕事の全体について聞き出そうとした書物。「期待と回想」ということばの含意については、鶴見の、伝記の仕事についての章で、次のように語られている。

レッドフィールド（アメリカの人類学者）の『ザ・リトル・コミュニティ』という本にとても影響を受けたんです。こういうことです。

「当時の見方と、それを振り返る現在の見方とをませこぜにししないで、一つを歴史の期待の次元、もう一つを歴史の回想の次元として区別する」

いまという状態で見ると、未来は自分の不安と期待が混じりあって見える。その時期から十年二十年たってから振り返って見るときには、不安と期待なしで見えるわけですから、あたかも自分に先見の明があったように書けば嘘になるでしょ。この問題なんです。

私の中にはマルクス主義者に対する一種の違和感があるんですよ。人間の歴史を、同時代の出来事を含めてすべて回想の次元としてながめながらじつは期待の次元にいる。そういう側面をもっているということを忘れている。それはいいかえると神の立場に立って同時代を論じることなんです。それはいけないと思う。

以上、引用は『期待と回想』下巻二五〇二九ページ

茨木のり子が「もつと強く」を書いた戦後復興期についても、現在の「気候変動待ったなし」の時代についても、ぼくの固定的な見方は鶴見の言う回想の次元に陥っていることが明らかだと思われた。過去の状況についてだけではなく、現在の状況について、つまりわが同時代についても、妥当する。これは、歴史認識の方法というより、むしろ歴史的感性の次元が問われている。こういうことが少しずつ分かって来た。

詩線というものを考えた時、回想の次元が解体を余儀なくされて、歴史の現場がリアルに出現してくる。詩にはそういう可能性があるのだろうか。これは自問として考え続けたことだ。

3

ここまで記してきたことを四月から五月にかけて少しずつ考えていたのだが、そのことと呼応するようにして、ぼくの中で始まったことがあった。

それは、石原吉郎の〈海を流れる河〉ということばとそのイメージを巡って繰り返し考えるところ。このことばは、出会った時、とても強い印象をうけたから、ぼくの中で、特別のことばであり続けたが、折節に、そのイメージを想いうかべるに留まっていた。（実際には、一つの文章を書いていた。後述する。）ところが、今年の授業の準備をしていて、このことばを授業ノートに思わず書き込んでいた。しかも、今年の授業イメージを託すことばとして。詩の試みを続けていることがこんな形で現れたらしい。

高校三年生を対象に「思想史と哲学」という授業を担当しているが、年初めのガイダンスで、世界全体を〈海に〉、それと取り組む思想家たちを〈流れる河〉に喩えて、語るうというアイデアが湧いてきたのである。このことばで語ることで、取り組む対象相互の間に、動きと流れが強く喚起されるという直感があった。

そして、この力は、茨木のり子の詩と戦後社会を考える場合においても、気候変動待たなしの現在を考える場合においても働くだろうと思われた。こんなふうにして、ぼくにとっては次なるステップがやってきた。

III 詩の試み 二〇二一年 五月

世界と私 その交通の動的イメージのために

1

〈海を流れる河〉（詩人石原吉郎のことばです）というたとえが
この人たちにはふさわしい

〈海〉は 世界を

〈流れる河〉は 思想家を 指し示します

私たちは 小川くらいのものでしょうか

今年の授業では 遠山啓 吉本隆明

鶴見俊輔 林竹二 加藤周一

さらには マルクス プラトンなどの人々が登場します・・・

初めて 私は このことばを

自分のことばとして 語りだしていた

二〇二一年四月 コロナ禍二年

「思想史と哲学」の授業ガイダンス

眼前に 参加する高校三年生 二十数名

比喩の力が 私たちをつないでゆく

シベリア抑留から帰還への日々の中で

石原吉郎は〈海を流れる河〉ということばを生みだしている

シベリアの大地を流れる河は ついに

北氷洋に注ぎ入るのであったが

彼は そこに 永遠の未完了としての

時間の持続と厚みのイメージを託している

〈海を流れる河〉は 私の中に 根を張り

潜在力として 長く 宿っていてくれた

比喩の力は 歴然としていた

無限ともいえる水量と水流の圧倒的なイメージ

〈海〉という非情のベクトル

〈流れる河〉という意志のベクトル

〈海を流れる河〉は その相克と相互浸透の

諸相と構造の表現を喚起する

その喩の力の変奏を

私は 詩の共和国の一人として試みていくだろう

2

歴史的場といったって それは 日々の中にあるのさ しかし

歴史的場というからには 大きな長い時間の中でのことでもある

歴史的空間というからには 世界的広がりを言うのだが
歴史的空間といたって 自分の周辺こそが生の現場にちがいないのさ

この時空を分断せず 行き来する精神を私たちは求めている
それを可能にするものこそが文学であるだろう

私は進んでゆく

次なるステップへと

〈海を流れる河〉という 喩の力とともに

私は進んでゆく

現実と 思想と 文学との

見えなかった地図を

探りながら

3

私は思い出していた

五年前 小田実の未完の巨編『河』全三巻(集英社)に挑戦

三年がかりで読みつないでいたが

彼の命日(十周忌) 七月三〇日から ラストスパート

八月一五日 ついに読了

朝鮮人の父と日本人の母を持つ

主人公 玄重夫(ヒョン・ジュンプ)少年の

学びと冒険と 果てしない対話の物語は

ユーラシア人民 の解放と平和を主題に

一九三〇年代 広州・上海を舞台に展開

『河』は〈海を流れる河〉を呼びよせた

まさに それが 〈海を流れる河〉であったのだから

私は「海を流れる河」と題する一文を綴り

この作品を ところに刻み 感謝のこぼれを表現した

とき おりしも 北朝鮮と米国の間に生み出された危機の夏

対峙するように 打ち出された 現役詩人の

一行の力 に感動

「私と業を分かち合う地球の子 ミサイルよ」

谷川俊太郎「ルバイヤートに倣って」(朝日新聞2017・7・26)

私の一文は この一行の引用で

高められ 引き締められた

詩の共和国の大先輩からのプレゼントに感謝

河は合流をくりかえしながら流れてゆく